

冒険教育プログラムにおける不登校生徒の身体性回復のプロセス

Process of physicality recovery of students unwilling to attend school who participated in adventure education program

○吉松梓（新潟医療福祉大学） 坂本昭裕（筑波大学）

キーワード：キャンプ、思春期、身体化、M-GTA

1. はじめに

現代の青少年をとりまく様々な問題の一つに不登校がある。わが国では、その支援策としての多様なキャンプ実践が行われ、その一つに冒険教育プログラムを用いた取り組みがある。また中学生年代に急増する不登校の心理的背景として、身体^{注1)}の急激な成長と心（自我^{注2)}の成長のアンバランスのひずみ那不登校や身体症状などとして出やすいことが報告されている（坂本, 2014）。このような生徒に対しては、行動化・身体化していた問題を悩みとして抱えることができるようになる援助の重要性が指摘され（伊藤, 2008）、身体から心に働きかけていく方法が注目されている。

そこで本研究では、冒険教育プログラムを身体から心に働きかけるアプローチと捉え、長期のキャンプに参加した不登校生徒の身体性^{注3)}回復のプロセスとその要因を質的研究により明らかにすることを目的とする。

2. 方法

1) 対象者

平成 X~X+4 年にキャンプに参加した不登校生徒のうち、発達障害や精神疾患を抱えておらず研究への同意が得られたもの 8 名（男子 5 名、女子 3 名、年齢 13~15 歳）。

2) キャンプの概要

不登校等の課題を抱える青少年を対象とした 17 泊 18 日間の長期キャンプで、マウンテンバイクでの移動を基本とし、沢登り、カヌー、登山、などのプログラムが特徴である。参加者は、例年 4~6 名程度であった。キャンプスタッフは、ディレクター男性 1 名、カウンセラー男女各 1 名（筆者）、食料スタッフ女性 1 名、サポートスタッフ数名であった。

3) データ収集

筆者がキャンプ中に参与観察したフィールドノート、対象者が語った内容の記録メモから、身体的なエピソード（身体の動き、身体症状や疲労など）をエピソード記述（鯨岡, 2005）を参考に抽出した。最終的に、各対象事例においてエピソード 12~17 個、約 6~8 千字をテキストデータとしてまとめた。

4) データ分析

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下, 2007）を用いた。分析焦点者を「冒険教育プログラムを導入した長期のキャンプに参加した不登校生徒」、分析テーマを「冒険教育プログラム中の身体性回復のプロセスとその要因」と設定した。分析の手順として、①テキストデータから意味解釈を行って概念を生成し、②個々の概念同士の関係からカテゴリーを生成し、③カテゴリーと概念の全体の関係を示す結果図とストーリーラインを作成した。また、個々の概念における十分な具体例を保障するために本研究では 3 事例以上 5 具体例以上を含む概念を採用した。

3. 結果と考察

分析の結果、26 の概念と 13 のカテゴリーが生成された。分析の結果である結果図（図 1）を提示し、カテゴリーを用いて理論モデルの概要および考察を述べる。

1) 【身体との関係性を取り戻す過程】

不登校生徒は第 1 段階として、【身体への違和感・ストレスの身体化】を抱えていた。

第 2 段階として、まずキャンプの過程で【身体の限界を体験して】いた。そして【身体の限界を体験する】ことによって、【身体に気づく】ことができ、【身体を通して自己に向き合う】こ

コアカテゴリー
身体との関係性を取り戻す過程

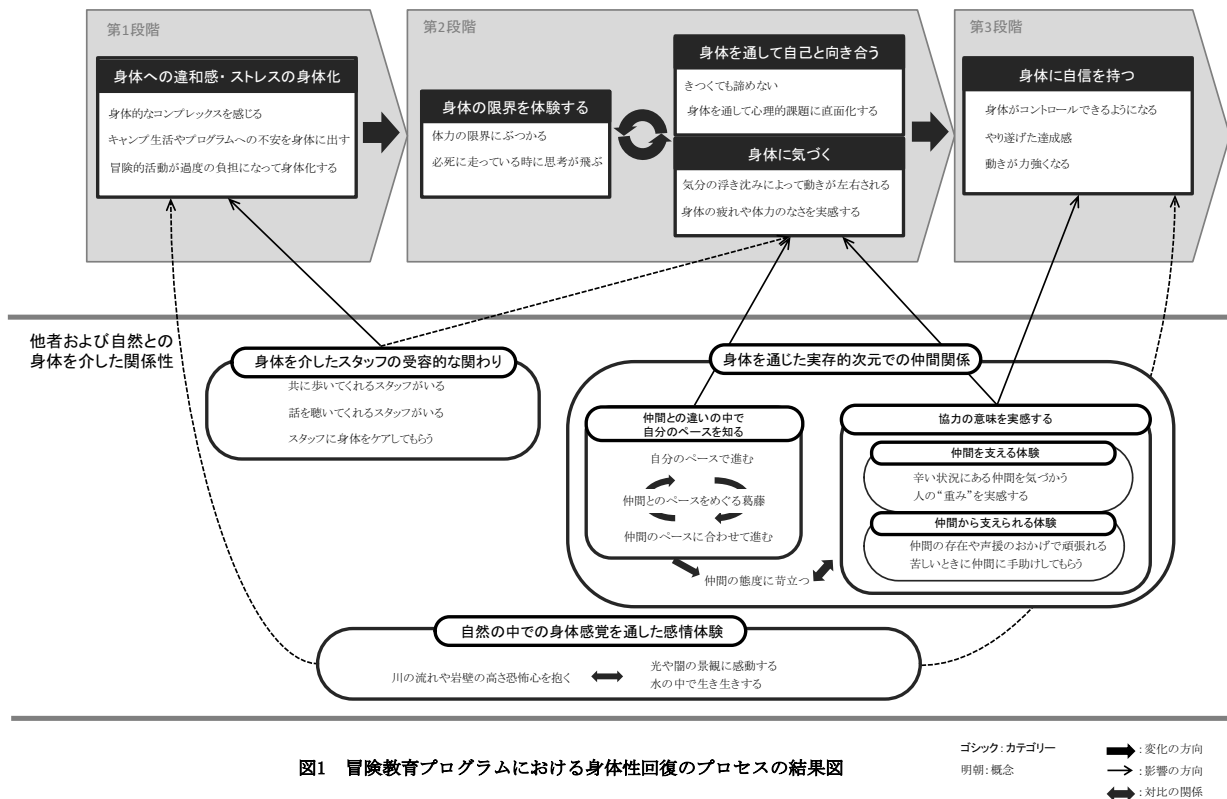


図1 冒険教育プログラムにおける身体性回復のプロセスの結果図

とができるようになった。

最終的には第3段階として、動きが力強くなり、身体がコントロールできるようになって、やり遂げた達成感を得るといった【身体に自信を持つ】までに変化した。

このように不登校生徒にとってのキャンプの体験は、思春期の自己の二重性（木村, 1978）によって乖離していた身体との関係性を取り戻し、身体という自分（＝身体性）を生きることに取り組む過程であったと考えられる。

2) 【他者および自然との身体を介した関係性】

【身体との関係性を取り戻す過程】主に前半のプロセスに貢献したのが【身体を介したスタッフの受容的な関わり】である。参加者は、辛いときに自分の話を聴いてくれ、共に歩いてくれるスタッフに出会い、身体をケアしてもらうことで、スタッフとの信頼関係を築くようになった。

後半のプロセスに大きく影響を及ぼしたのが【身体を通じた実存的次元での仲間関係】である。参加者は、時には仲間の態度に苛立ちながらも、【仲間との違いの中で自分のペースを知

る】体験をしていた。さらに、仲間から支えられ、仲間を支える【協力の意味を実感する】体験をしていた。このような体験を積み重ねることが、自らの身体に気づき、自己に向き合う契機となっていた。

このように、他者からホールディングされ、共同体験の中で相互作用をすることで、不登校生徒の身体性の回復が促進されたと考える。

また、【自然の中での身体感覚を通じた感情体験】も、【身体との関係性を取り戻す過程】に少なからず影響したことが推察された。

注

- 1) 身体：主観的に感じる事ができる体であり、客観的な自然科学の対象としての肉体ではないものとする。
- 2) 自我：「自分で自分のことを考えるときに『私』として意識されるもの」であり、「その個人の『主体』であり、相応の『自立性』『統合性』『一貫性』などをそなえている」ものである（河合, 2003）。
- 3) 身体性：心身は分けられないという前提のもとに、心身がつながっているもの、心身を一体のものとして捉えたときの心身全体を表現するものとする。